

# 読む**中学**進学



## 受験者数と偏差値の関係



森上教育研究所 学校アドバイザー  
小泉壮一郎

2015/01

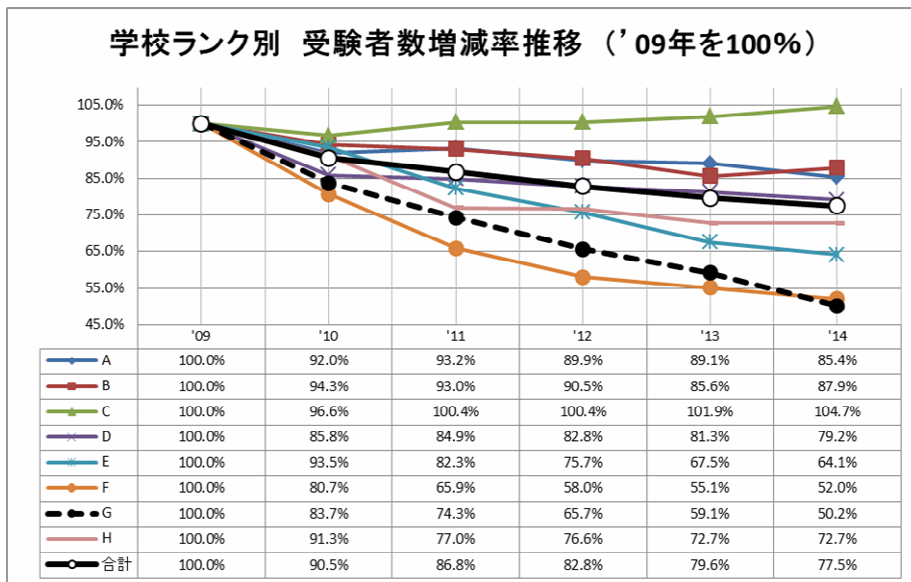


今回は、受験者数と偏差値の関係を考えてみたいと思います。一般的に、入試で受験者数が増加するという事は、その学校の人気が高くなったことを意味します。学校の人気が高くなれば、偏差値は高くなるはずですが、逆に、入試で受験者数が減少すれば、その学校の人気が低くなり、偏差値は低くなるはずですが。

まず、受験者数を分析します。個々の学校では傾向が分からないので、学校ランク別にグループ化し、過去5年間の受験者数の変動を分析します。＜資料1＞の'09年を100%とした時の'14年の受験者数増減率を見てみましょう。リーマンショック以降、中学入試では、受験者数が減少する中学が多く、＜資料1＞のようにCランクを除きどのランクも、'09年を100%とした時の'14年の受験者数は100%以下となっています。Cランクが増加した原因を調査したところ、1月受験で顕著に受験者数を増やしている学校が1校あり、その影響で100%を越えたわけで、その他のCランク校が増加してはいませんでした。つまり、Cランク校も1校の例外を除き受験者数は減少傾向でした。

受験者数の平均増減率は77.5%で20%を超える減少で、Dランク以上とEランク以下で増減率に大きな差があり、二極化しています。つまり、Dランク以上では比較的受験者数の減少が少なく、Eランク以下では比較的受験者数の減少が多いことが＜資料1＞の表から分かります。

＜資料1＞



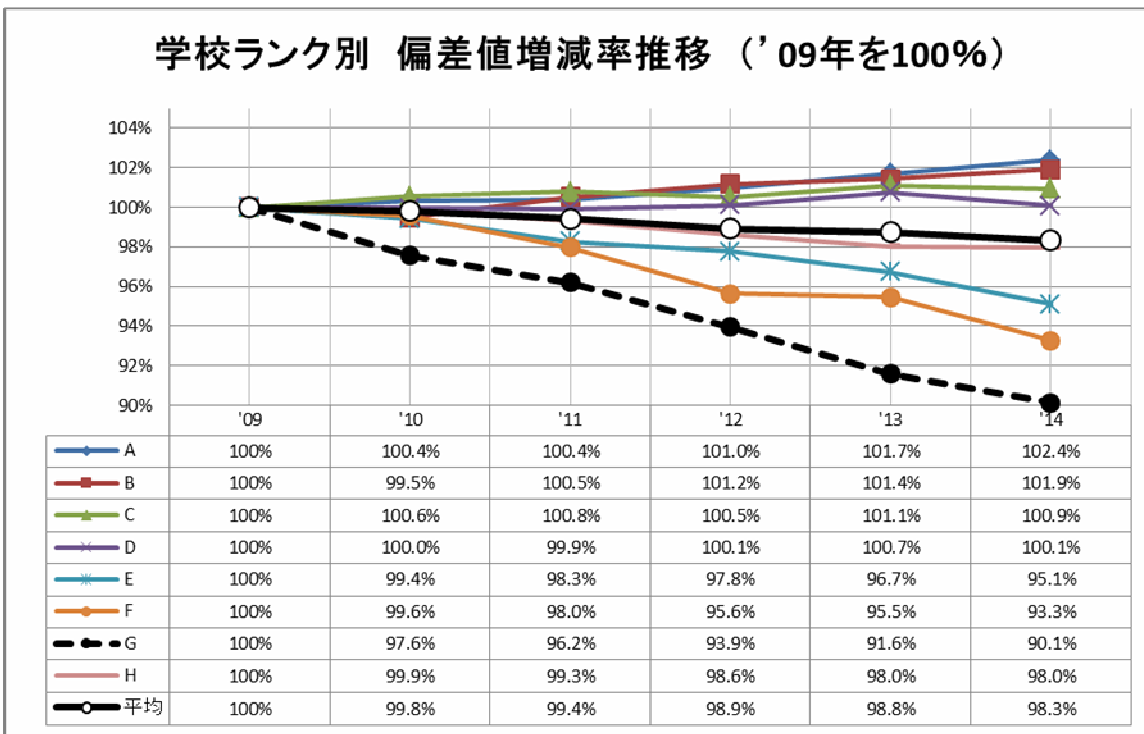
次に、偏差値を分析します。受験者数と同様、過去5年間の受験者数の変動で学校ランク別に分析します。＜資料2＞の'09年を100%とした時の'14年の偏差値増減率を見てみましょう。リーマンショック以降、受験者数の推移では減少傾向が明確ですが、偏差値の推移を見ると減少している学校ランクもありますが、増加している学校ランクがあることも分かります。増減率の平均を見ると、'09年を100%とした時の'14年の受験者数の



増減率（77.5％）に比べ偏差値の増減率（98.3％）は、減少が少なく、受験者数に比べれば、ほとんど変動が無いと言っても良いくらいです。

しかし、個々の学校の受験者数と偏差値の関係は、受験者数が増加・減少すれば、偏差値も増加・減少するはずなのです。Cランクを除く、どのランクでも受験者数が減少していることを考えると、偏差値も減少するはずですが、A～Dランクの学校は100％を越えていることが分かります。それらの学校の中には受験者数が増加している学校もあると思いますが、平均の受験者数増減率から、受験者数が減少している学校が多いのではないのでしょうか。

<資料2>



'09年を100%とした時の'14年の受験者数増減率だけではなく、実際に受験者数が増加した学校と減少した学校数についても調べなければ、受験者数の増減を分析することができません。そこで、'09年の受験者数に比べ'14年の受験者数が増加した学校と減少した学校が、どれだけあったかを調査し、<資料3>にまとめました。やはり、'14年の受験者数増減率が100%を上回ったCランクでも増加したのは33校中7校だけで、増加した学校の割合はA・Bランク校よりも低いことが分かります。合計でも'09年の受験者数に比べ'14年の受験者数が増加した学校は全体の20%で5校に1校しかありません。いかに、リーマンショック以降の受験者数が減少したかが分かります。

増減率が50.2%と減少率が最も高かったGランクは、減少した学校の割合は88%で、E・Fランクよりも低いことが分かります。つまり、<資料1>の受験者数増減率ではG



ランクはE・Fランクよりも減少が多いのですが、受験者数が増加した学校の割合はE・Fランクよりも高いこととなります。Gランク校では、受験者数が減少した学校では顕著に減少したこととなります。E・Fランクでは、受験者数の減少率はGランク校よりも少ないのですが、受験者数が増加した学校の割合は低く、Fランクでは20校に1校で、1校しかないことが分かります。

やはり、予想したように80%の学校は、受験者数は'09年よりも減少していますが、5校に1校は増加している学校もあります。学校ランク別に見ると、Hランクを除き、上位校と中下位校で二極化しているようです。

### <資料3>

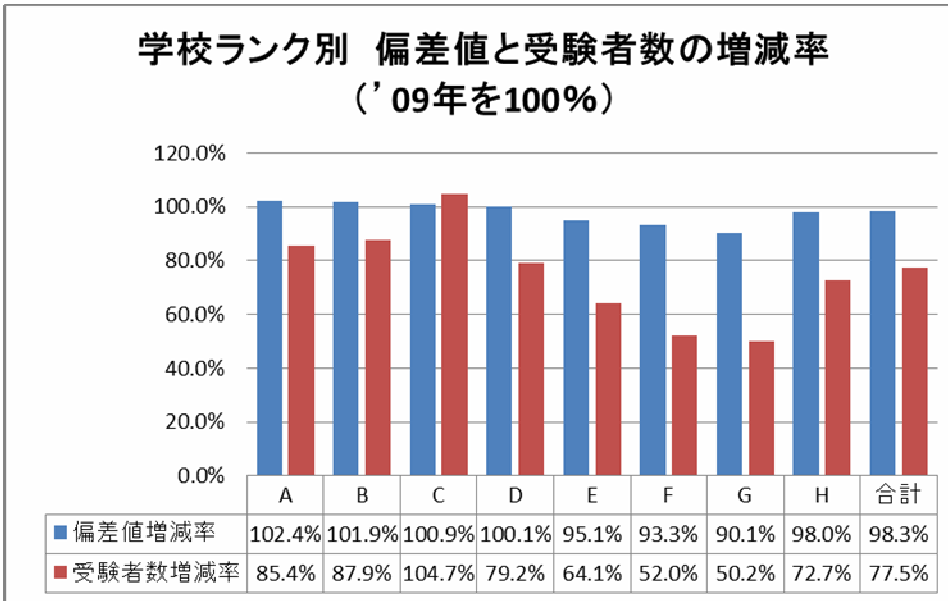
受験者数増減率別 学校数と割合 増加には横ばいも含む

	増加： 100%以上	減少： 100%未満	合計	増加： 100%以上	減少： 100%未満	合計
A	5	14	19	26%	74%	100%
B	7	10	17	41%	59%	100%
C	7	26	33	21%	79%	100%
D	6	25	31	19%	81%	100%
E	2	26	28	7%	93%	100%
F	1	20	21	5%	95%	100%
G	9	65	74	12%	88%	100%
H	18	36	54	33%	67%	100%
合計	55	222	277	20%	80%	100%

<資料4>では、学校ランク別の偏差値増減率と受験者数増減率を比較しやすいようにグラフにしたものです。個々の学校では、受験者数が増加・減少すれば、偏差値も増加・減少すると考えられますが、リーマンショック以降の中学入試のように全体の受験者数が減少し続けるような場合は、比較的受験者数の減少が少ないA～Dランクの学校の偏差値が100%以上となり、比較的受験者数の減少が多いE～Gランクの学校の偏差値が100%未満となります。また、受験者数に比べ偏差値の変動は少ないことがグラフから分かります。

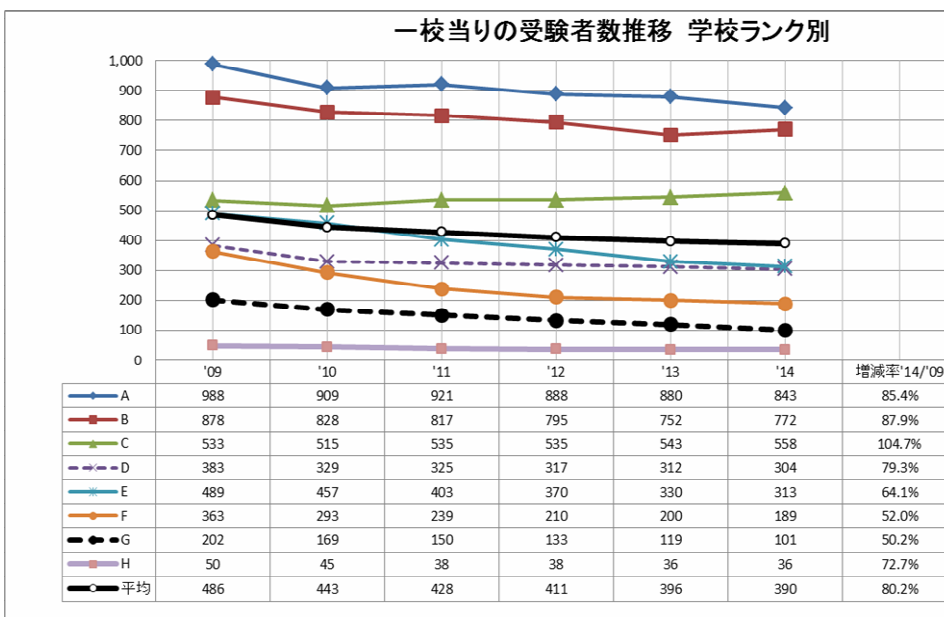


<資料4>



<資料5>の「一校当りの受験者数」を見るとランクによって、受験者数の規模が異なることが分かります。学校ランクが高いほど受験者数が多く、低いほど少なくなりますが、Hランクの'14年受験者数は36人と極端に少ないことが分かります。Hランクの'14年/'09年は72.7%で、E～Gランク校よりも大きく、学校ランクが低いほど受験者数増減率が低くなる傾向に当てはまりませんでした。その原因は、'09年の時点で受験者数が少ないながら、学校の特色を支持する受験生・保護者を減らさない努力をしたことが分かります。

<資料5>





個々の学校の受験者数を見ると、高い割合で隔年現象があることが分かります。男子校や女子校の共学化、学校改革による顕著な学校の変化、有名大学などの系列に参入、新校舎の建設、制服のモデルチェンジ、大学合格実績の顕著な向上など、人気が出る原因は様々です。人気が出れば、偏差値が上がり、翌年は高い偏差値を避ける受験生・保護者の習慣により受験者数が減少することで隔年現象となります。隔年現象は繰り返されますが、やがて収束して一定となります。

リーマンショック以降の受験者数が減少局面でも学校全体の偏差値は減少せず、相対的に受験者数の減少が少なかった上位ランク校は偏差値が増加し、相対的に受験者数の減少が多かった中下位校の偏差値は減少しました。

学校全体では偏差値の平均は、論理的には偏差値 50 となるはずで、受験者数の増減には影響されないはずで、つまり、個々の学校で偏差値が増加している学校があれば、偏差値が下がっている学校があるはずで、考えてみれば当たり前のことですが、偏差値は相対的な評価なのです。

受験者数と偏差値の関係は、個々の学校では、人気が出れば受験者数が増加し、偏差値は上がります。しかし、学校全体では受験者数が増加・減少しても学校全体の偏差値が増加・減少するわけではありません。